

書き下ろし時代小説

西川右近

Nishikawa Ukon

兄者

あにじゃ

義経の
けつりよう
血霊

だ い 文庫
わ



西川右近（にしかわ・うこん）

一九三九年、名古屋市に生まれる。日本舞踊西川流三世家元。古典舞踊の世界にとどまらず、新作舞踊劇の脚本、演出、振り付けを手がける。演劇、音楽とのコラボレーションにも取り組み、海外公演も多い。また、父である西川流二世家元・西川鯉三郎が一九四五年に創始した、日本舞踊の長期公演「名古屋をどり」を主宰している。代表的な脚本・演出には『八重山椿』『望月の胸』『鬼火』、監修・編著書には『日本舞踊 舞踊劇選集』（財団法人西川会）などがある。

あにじや
兄者

よしつね
義経の血霊

著者

にしかわうこん
西川右近

Copyright ©2007 Ukon Nishikawa Printed in Japan
二〇〇七年三月一五日第一刷発行

発行者

南 暁

発行所

だいかわ
大和書房

東京都文京区関口一―三三―四 千一―二一〇〇―一四
電話 〇三―三二〇三―四五一
振替 〇〇―六〇―九一六四二二七

ブックデザイン

鈴木成一デザイン室

タイポグラフィ

小泉 均十阿部宏史

装画

山本タカト

本文印刷

慶昌堂印刷

カバー印刷

山一印刷

製本

小泉製本

ISBN978-4-479-30088-5

乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。

<http://www.daiwashobo.co.jp>

兄者

義経の血霊

西川右近

西川右近

大和書房

大和書房

目次

序章	この物語の血脈(系図)	6
第一章	神風	9
第二章	兄と弟	15
第三章	喜びと悲しみのはざま	55
第三章	嫉妬	93
第四章	今生の別れ	141
第五章	光陰は矢のごとく	197
第六章	呼びあう血	259
第七章	憎しみの行方	297
終章	血の絆	333
	あとがき	339
	12世紀のアジア(地図)	342
	13世紀のモンゴルとその周辺(地図)	344

兄者あにじや

義経の血霊けつりよう

■この物語の血脈(系図)

陰陽師

後白河法皇

嵯峨麻呂

?

国俊

日本

貞兼

峰

無妙

尼僧

政子

正室

由良

正室

源義朝

愛妾

常盤

乙葉

愛妾

源頼朝

正室

源頼朝

静

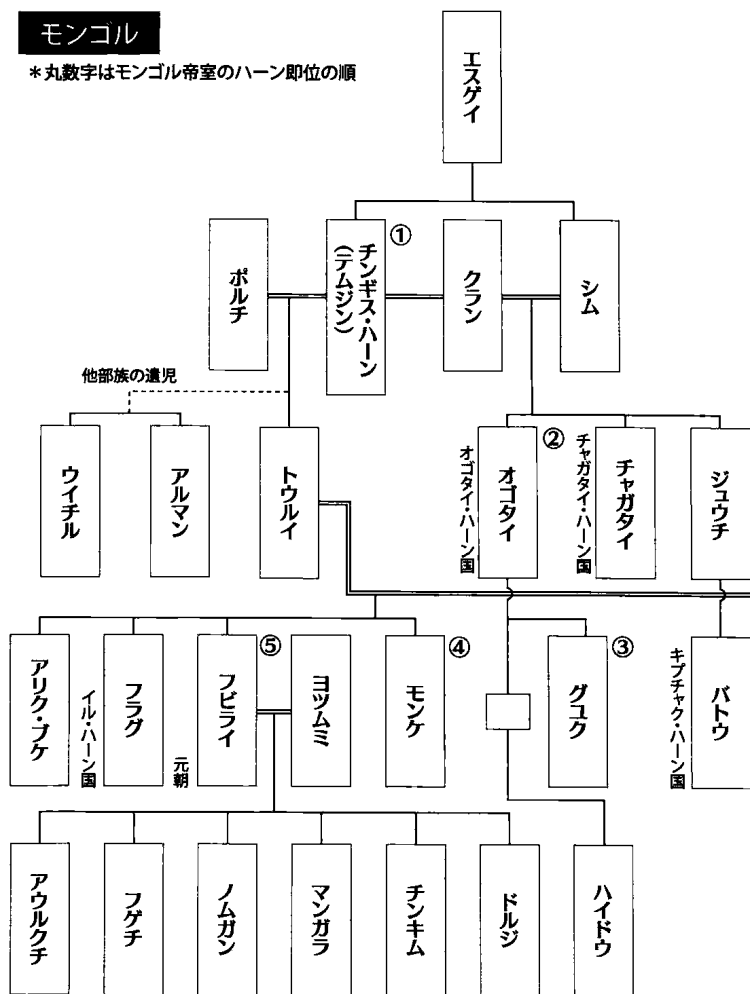
愛妾

源義経

縁系

モンゴル

*丸数字はモンゴル帝室のハーン即位の順



序章

神風かみかぜ

「神風」。この言葉の本当の意味が忘れ去られている。

日本に神風が吹いたのは一二七四年と一二八一年の二度である。

大蒙古軍もうこが二度にわたって日本を襲ったとき、その風は大きく吹き荒れた。

蒙古軍を迎え撃つ日本の「幕府軍」ほうじよう北条勢が敗北を覚悟したとき、その風は大きく吹き荒れ大船団を追い払ったのである。

二度にわたって吹いた、奇跡とも思われるその風を人々は「神風」と呼んだ。

その風が吹いたのは、モンゴル（蒙古）の統一を望んだチンギス・ハーンの孫、フビライの時代である。

チンギス・ハーンがモンゴルに出現した時代、日本では源氏と平氏の二大武士

集団が戦っていた。だが、孫のフビライが日本を襲ったときは、すでにその戦いも終息していた。二つの勢力が減び、別の武士集団である北条氏が権力の座に就いていたのである。

平氏との争いで大きな戦果を上げ、永遠の英雄と後世まで人々に慕われた源氏の若大将源義経が、兄頼朝の執拗な追い討ちで無念の死を遂げてから八十余年後のことである。

平安時代から鎌倉時代にかけて日本を支配していたのは、天皇を頂点に置き、その陰で武士の勢力を思うままにあやつっていた貴族たちであった。

天皇は、皇位を象徴する「三種の神器」（剣、勾玉、鏡）を持つ者が正統なる継承者とされていた。だが、その天皇さえも支配者の座を維持するために自分の都合で武士集団を味方につけたり、また敵に回しながら、権力をほしいままにしていた。

皇位継承をめぐる対立していたのは、天皇と、天皇の地位から退いたのちも権力に執着し続けて院政を布いた上皇・法皇である。その熾烈な権力争いは、貴族、武士を問わず、陰謀と策略に満ちた頭脳合戦に巻き込んでいた。

一一五九年、有力貴族の藤原氏ふじわらと組んで政権をねらった源氏一族は、平清盛たいらのきよもりとの戦いに敗れ、多くの武將を失った。まだ少年であった源氏の頼朝は負け戦のあと、かろうじて命を助けられたが、伊豆で流刑の身となった。

院政を開始したばかりだった後白河上皇ごしろかわもまた、権力を失った。

その後、出家して法皇となった後白河は、平清盛を利用して権力を絶対的なものにしようと画策したが、平氏の力が強まるにつれて、その存在が疎まうとしいものになってきた。挙げ句、清盛によって鳥羽殿とばどのに幽閉されるに至り、今度は源氏の力を利用して、失った力を取り戻そうと考えた。

法皇はその足がかりとして、頼朝を流罪るざいの地から救い出すことにした。

頼朝を再び大将の座に復帰させ、永年の宿敵、平氏一門を残らず討伐とうばつするといふ大役を命じるためである。

源氏と平氏の戦いで数々の名声を得た頼朝の弟義経は、そのあまりにも短い生涯から、悲劇の人として惜しまれ人々に長く語り継がれている。若き大将の死を惜しむあまりに、義経生存説もいろいろな形で残されている。

奥州平泉で没したはずの義経が蝦夷えぞに渡り、さらに蒙古のチンギス・ハーンになつたという説もある。

それほどこの悲劇の若武者の壮絶な最期さいごが多くの人に惜しまれているのであるが、義経とチンギス・ハーンは、ほぼ同時期に歴史の表舞台に姿を現しているもので、同一人物視するのは無理である。だが、この二人を同時代のヒーローとして比較登場させてみると、興味深いものがある。

頼朝、義経の兄弟は、異母兄弟ではあるが血のつながりがあり、それゆえに醜みにくい争いを招き、その血に翻弄ほんろうされた。これに対してチンギス・ハーンの一族は、さまざまな縁で結ばれ、血のつながりにこだわることなく強い結束を生んだ。

人間の血縁の醜みにくさ、それゆえの戦い、神や仏の力を借りても永遠の平和を叶かなえることができずに過ちを繰り返す人間の愚かさや弱さ。それらを見直してみたいと、この物語は始まるのである。

宇宙の彼方かなたで無数に光る星のなかから、ある日、あるとき、一つの星が流れた。やがてそれは数億年の年月を経て砕け、無数に分かれた。そのうちの二つの破片が地球に向かった。そして一つは小さな島国日本に、もう一つは果てしなく広

がるモンゴルの草原に落ちて燃え尽きた。

二つの星の破片は、互いの存在を知ることもなく、遠く離れた二つの国で二つの生命に宿った。

第一章 兄と弟

吹き荒れる風の行方ゆくえ

荒涼とした大地を吹き荒れる風は、黄塵こうじんを巻きあげ嵐となり、黙々と歩き続けるキャン一族の者たちの行く手を遮さえぎるように容赦ようしやなく襲いかかった。

蒼あおき狼おおかみを祖先に持つと言われたこの一族は、サマルカンドの地から長い放浪の旅を続けていた。

西の軍勢や周りの部族、東の大国、金の大軍きんに囲まれて幾度となく戦い、敗北と屈辱くつじよくを味わった。ついには住む土地も失い、わずかに残った兵や民と瘦やせ衰えた家畜を従え、果てしなく続く草原を彷徨さまよいながら、すでに八カ月以上も安住の地を求めて歩き続けている。

大地から巻きあがる砂風は黄砂こうさの嵐となつて途切れることなく幾日も一族を襲